

令和8年度

入学試験問題（中学校）

B日程

国語

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部変更しています。)

みなさんは食事の前に「いただきます」と言っていますか。また食べ終わってから「ごちそうさま」と言っていますか。私は一九五〇年生まれですが、小さい頃は家庭の食卓で「いただきます」と言ったことはありませんでした。「ごちそうさま」だけでした。「いただきます」と言う作法を知ったのは、小学校一年生の学校給食の時でした。生まれてはじめて給食の時に「いただきます」と口に出したのです。その時の気持ちをよく覚えていますが。それまでそういう習慣がわが家になかったことを、とても恥ずかしく思いました。

でも、恥ずかしく思う必要は全くなかったことが、最近わかりました。

この作法は戦前の都会で、始められました。ある習慣が廃れてきたので、学校の道徳教育の中で考えられて始まったそうです(熊倉功夫『文化としてのマナー』岩波書店、一九九九年)。やがて、それが戦後の小学校の学校給食の作法として全国に広まり、家庭にも定着していったのです。

それでは、かつての多くの家庭では「いただきます」と言う代わりにどういう作法(習慣?)が行われていたのでしょうか。これから先は私の経験をもとに話します。

わが家では、食事の用意ができるとまず、神棚と仏壇に供えていました。家族が食べる前に、食べもの(とくにごはん)を器に盛り付け、神さまと仏さま(ご先祖さま)に、真っ先に食べてもらっていたのです。

どうしてそのようなことをしていたかと言いますと、食べものは天地自然のめぐみですから、真っ先に天地自然の名代である神さまと、田畑を拓いてくれたご先祖に、感謝の気持ちを「食べもの」を供えることで、伝えていたのです。わが家は農家でしたから、そうした行いをずっと、いままで続けています。

「いのち」がくり返し、くり返し引きつがれ、天地自然のめぐみが食べものとなり、今日にいたるまで、ずっと私たち人間のもとに届けられてきたことへの感謝の気持ちの現れでした。

(A) 百姓が減っていき、都市への人口集中が起きると、この習慣が消えてきました。都会では家庭の中に、神棚や仏壇もない家も増えてきました。そこで、食事の前に神仏に食べものを供える習慣に代わるものとして、「いただきます」と口に出す作法が考えられたというわけです。なお、「いただきます」と言う時に合掌するのは、昔から僧侶が食事の前に行っていた作法を取り入れたものです。

お客が来た時に、「どうぞ召し上がれ」とすすめ「はい、いただきます」と返答していたところから発想されたようです。一方「ごちそうさま」の方は、江戸時代には、もう使われていました。「馳走」とはおいしい料理のことですから、「おいしい料理でした」と、料理を出した人や料理をした人に対して告げる言葉です。

(B) あなたは「いただきます」を、いったい誰に、何に向かって言っていますか。次の中から選んで

問一 (A) (B) (C) にあてはまる語を、それぞれ

次から選びなさい。ただし、同じものは一回しか使えません。

ア 例えば      イ すると  
ウ ところで      エ しかし

問二 部①は、どのような習慣ですか。本文中から

二十字以内で抜き出しなさい。

ください。

- ㉞ 料理をつくってくれた人に
- ㉟ 食材や料理の費用を稼いだ人に
- ㊱ 料理の材料である食べもの（生きもの）を手入れたお百姓に
- ㊲ 食べものを育ててくれた天地自然に
- ㊳ 目の前の食べもの（生きもの）
- ㊴ とくに意識はしないで言っている

百姓ではない大人に尋ねると、㉞、㉟、㊱の順番で多く、㊲はあまりありません。たしかに㉞、㉟の料理にかかわった人や、㊱の「お百姓」は、すぐに想像できます。㊳の「天地自然」になると、その食べものが育った村の、その季節の環境を思い浮かべないといけなくなりそうです。さらに㊴の「食べもの」自体には、目の前に伝える相手がいるのですから、簡単なようで、一番難しいかもしれません。いま食べようとしているごはんや野菜や肉は、生きものとしては死んでいます。それなのにどうやって感謝の気持ちを伝えればいいのか。いや、伝わるかどうかではなく、自分の感謝の気持ちを表しているんだ」と考えている大人が多いのです。どうやら「いただきます」という習慣は、自己満足になってきたような気がします。

ところが農業体験をしたことのある子どもたちに、同じ質問をすると、㊴と答える子どもが少なくありません。「だって、その食べものが生きものだったことを想像できるから」と言うのです。

食べものは人間と神さまをつないでくれます、といったらみなさんはびっくりするでしょうか。私の村の神社の祭りの時の「直会」<sup>なほひ</sup>が、まさに人間と神さまをつないでくれるものなのです。

私の村だけでなく多くの地域で、お祭りの神事では必ず、神さまに米や酒、野菜や果物、魚や海藻<sup>かいそ</sup>などの食べものを供えます。昔はちゃんと料理したものでしたが、現在では生で供えます。じつは神事とは神さまに食べもの（神饌<sup>しんけん</sup>）を食べてもらう儀式でもあるのです。さすがに神さまだと感心するのは、神さまが食べた後でも、供えた食べものは減ることなく、そのまま残っています。食べた菌形が残っているなんてことはありません。そこで<sup>㉞</sup>で神事の後に、神さまが食べたお下がりをみんなで食べるのです。これを「直会」と言います。お祭りの神事は、必ず「直会」がつきものです。まあ、酒も出されるので宴会だと思っている人も多いでしょう。

現在では、さすがに生の神饌は食べられませんので、私たち村の氏子たちは、それぞれに重箱につめた弁当を持参して、食べます。この直会によって、神さまと人間が同じ食べものを食べるわけです。これは「神人共食」

問三

㊴に入れるのにふさわしいものを本文中の㉞㉟㊱から選び、記号で答えなさい。

問四

部㉞とあるが、この行為が意味することとして最も適当なものを一つ選びなさい。

ア 酒も飲んで、みんなでにぎやかに日頃の労働をねぎらうこと。

イ 食べものの中にあるいのちを、神さまとともに身にとり込むこと。

ウ 食べものを重箱につめて持ち寄り、神さまの前で宴会をおこなうこと。

エ 健康のために、食べものの中にある栄養分をバランスよくとること。

と呼ばれています。食べものの中の「いのち・魂」<sup>たましい</sup>を、神さまとともに身にとり込むのです。このことによって、私は殺生を許されるような気がします。

少し戻って、食べものが生きものというより料理の材料である「食材」に見えてしまう原因を、もう少し深く考えてみましょう。まずニンジンをとりあげて、「食材」としての典型的な語り方を、栄養学の視点から見てもみましょう。

「ニンジンには、β-カロテンという栄養素が多く含まれています。このβ-カロテンは体内に入るとビタミンAに変化し、皮膚や粘膜の健康維持に役立ちます。ニンジンの中の水溶性のビタミンであるビタミンB群やビタミンCは茹でることで水に流れ出てしまいますが、脂溶性のビタミンAやビタミンEは、油で炒めると吸収率が上がります」

人間のためには有用な情報ですね。ところが別の語り方もあります。なかなかニンジンを食べようとしなかった子どもに、お母さんがこう語りかけたそうです。

「このニンジンはね。アゲハチョウの幼虫さんも食べているのよ。あなたもお母さんもアゲハチョウさんも同じものを食べて生きているのよ」と。(C)、子どもは食べるようになったそうです。どこまで子どもが理解したのかよくわかりませんが、このように語るお母さんの語り口と楽し気な表情が影響したのではないでしょうか。これは「食材」の説明と言うよりも、ニンジンという生きものの生を自分たちの生に重ねて語っていますよね。

現代社会はいつのまにか前者(食材)の説明が幅を利かせるようになりました。それは食べものが市場経済に乗せられるようになったからです。人間にとっての有用性(栄養、価格など)から価値づけするようになったからです。

この結果として、食べものは「食材」<sup>⑤</sup>に変化してきました。食べものが価格で決められたり、栄養成分で判断されたり、そうした基準で「選択」される時の呼び名が「食材」なのです。それまでは、「そこにあるものを食べる」「とれたものを食べる」ことしかできませんでした。選択するという気持ちはない食べ方が主流だったのです。

(宇根豊『農はいのちをつなぐ』)

注1:代理。

注2:市場を通じて、生活をするのに必要な物やお金などを、手に入れたり、つかったり、交換したりするはたらき。

問五 部④とあるが、どのように語ることでですか。解

答欄に合うように本文中から二十字以内で抜き出して  
答えなさい。

問六 部⑤とあるが、なぜですか。四十五字以内で

答えなさい。

次の文章は星新一の短編小説『冬きたりなば』の一節です。エヌ博士は、自らの理論を応用した宇宙船を完成させましたが、打ち上げるための資金が足りなくなりました。そこで、たどり着いた星で商品の宣伝や販売を行うことを約束して企業から資金を集め、助手一人と共に何とか宇宙に飛び立つことができました。これに続く後半部分を読んで、下の問いに答えなさい。

「あ、あそこに惑星が見えます。あの赤っぽい太陽のそばです」

助手が興奮した声で報告し、博士は聞きかえした。

「どんな惑星だ」

①「望遠鏡で観察したところでは、地球によく似た状態のようです。大気も住民も……」

「住民の文明の程度はどうだ」

「地球よりは、いくらか劣るようです」

「それは、ありがたい。あまり文明が高いと、運んできた商品を笑われ、ここまで来た意味がなくなる。手ごろな星があつてよかった。……さあ、機首をそちらに向ける」

と、命令を下しながら、エヌ博士はボタンを押した。それにつれて、外部の広告は一段と明るさを含みました。スポンサーたちとの約束は約束。博士は良心的に、それをはたすつもりだった。

やがて、ロケットはその惑星に接近し、徐々に高度を下げ、小さな町のはずれにある野原に着陸した。べつなボタンを押すと、スピーカーからコマースャルソングが流れ出し、軽快なメロディが四方にひろがっていった。

季節は秋に相当するらしく、草や木の葉が色づいたり、散りはじめたりしていた。博士はそれを眺めながら、つぶやいた。

「さて、どうやって、住民たちを集めたものだろうか」

「その心配は、いらぬようです。住民たちのほうから、善良 そうな連中です」と、助手は指さした。凶暴そうなようすは少しもなく、武器らしいものも持っていない。それどころか、みな楽しい表情をしている。

エヌ博士はそれをたしかめ、ドアから出た。そして、助手とともに手まね、身ぶり、そのほかあらゆる方法を使って、自分たちが地球という、べつな太陽系の惑星からやってきたことを、なんとか相手に知らせることができた。

「……というわけです。これからは、仲よく交際いたしましょう」

それに応じ、住民たちもこんな意味の答を伝えてきた。

問一 部 (い)、(ろ)、(は) の本文中での意味として最も適切なものを一つずつ選びなさい。

(い) 「手ごろな星」

ア 地球の品物を売るのにちょうどよい星。

イ 自然が多くて、人が住みやすい星。

ウ 住人が少なく、商売のライバルが少ない星。

エ 地球から近くて、宇宙船で行きやすい星。

(ろ) 「善良そうな連中」

ア 博士たちにおだやかですなおに接してきそうな人たち。

イ 頭がよく、地球の文化を理解してくれそうな人たち。

ウ おだやかで争いをせず、平和を大切にする人たち。

エ 地球人を尊敬し、素直な態度を見せてくれる人たち。

(は) 「代金をふみ倒して」

ア 品物を手に入れた代わりのお金を支払わないで。

イ 品物を手に入れた代わりのお金を一部しか払わないで。

ウ 先に品物を受け取ったことを認めないで。

エ 博士たちの思いやりの気持ちをふみにじって。

問二 部 ①のように博士が助手にたずねたのはなぜですか。最も

適当なものを一つ選びなさい。

ア 住民の文化レベルを知ること、この星と地球とがどうすれば仲良くなれるかを考えたかったから。

イ 住民の生活水準を知り、地球で流行おくれになった品物でも買ってもらえるかを確かめたかったから。

「こちらこそ、よろしく。わたしたちはいま、収穫期が終ったところです。楽しくお祭りをしているところですが、ごいっしょにいかがですか」

② 博士と助手とは、顔を見あわせて、うれしそうに笑った。楽しげなムードの事情もなかった。それに、収穫が終った時期なら、商売には適当にちがいない。忙しい時に来あわせてたら、相手にされないで帰らなければならなかったかもしれない。

「それはそれは……」

博士は勢いこんで、住民たちに商売の話を持ち出した。

「……じつはわたしたちは、みなさまのお役に立つような、各種の品物を運んでまいりました。もし、お気に召すようなものがあれば、こんご大いに貿易をはじめよう、わたしが取りはからってさしあげます」

博士は助手に命じ、船内を展示場として開放し、住民たちをなかに案内させた。

上等な服、便利な日用品、味のいいお菓子など。なかには、地球で流行おくれや生産過剰かじょうになっている品もまざっていた。だが、この星の住民たちの目には、すばらしい宝にうつたらしかった。彼は目を丸くして見つめ、手でそっとさわわり、おたがいに、ささやきあっていた。

「さあ。いかがでしょう。どの品も、地球で最高級のものばかりです」

と、博士は自信をえて、あいそよくすすめた。しかし、その反応は予期しないものだった。

③ 住民たちは手を振り、いらぬという意志を示したのだ。博士と助手は、ふしぎそうに話しあっていた。心から欲しそうなようすなのに、なぜ買わないのだろうか。しかし、その点は、住民たちに聞いてみなければわからないことだ。

「どうなさったのです。遠慮えんりょすることはありませんよ。品質についてでしたら、わたしが責任を負います」

その答はこうだった。

「ええ。欲しいことは欲しいのですが、いまは買えません。来年にしましょう」

「来年ですって……。なにも一年ぐらい、たいしたちがいはないではありませんか」

「この星では、これから冬に入るので。冬のあいだは使えませんから、来年の春にでもなったら……」

そんなことで追い返されるわけにはいかない。博士は熱意をこめて説明した。

「冬でも使えますとも。たとえば、この電気毛布はいかがでしょう。原子力電池で暖かくすごせます。また、冬の化粧品けしょうひんとしては……」

ウ 住民の科学技術力を知り、この星が地球にとって危険な相手かどうかを調べ、安心したかったから。

エ 住民の社会の仕組みを理解し、この星と地球とが経済協力を始めるきっかけにしたかったから。

問三 部②における二人の気持ちの説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

ア この星の人が優しそうなので、長い宇宙の旅の疲れがとれそうだと安心する気持ち。

イ 住民の文明が未熟なので、地球の知識を教えて喜んでもらおうと期待する気持ち。

ウ 収穫が終わり、品物を売るのにちょうどいい時期だとわかってほっとする気持ち。

エ 住民に地球の品が喜ばれたので、すぐに商売が始まるに違いないと信じる気持ち。

問四 部③のように住民たちがふるまったのはなぜですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

ア 地球からの品物が、自分たちの暮らしに合わず、必要ないと思っただから。

イ すでに自分たちの星で良い品物を作っていて、地球の品物はいらなかったから。

ウ これから冬眠の季節に入ると、そのあいだは何も品物は必要なくなるから。

エ 地球の人を信用しておらず、だまされるのではないかと心配していたから。

だが、住民たちはやはり手を振った。

「わたしたちの星では、冬になると、みな冬眠に入ります。ですから、そのあいだは、なにも必要ないのです」

「そうでしたか。地球にはそんな習慣がないため、気がつかなくて失礼しました。……しかし、春になってすぐお使いになれるよう、いまお買いになっておいては、いかがでしょう」

「じつは、そうしたい気持ちです。しかし、冬にそなえて、収穫物をすべて貯蔵してしまいました。代金としておはらいするのために、それをまた引っぱり出すのは、たいへんな作業なのです」

博士はうなずき、助手と相談した。

「どうしたものだろう。良心的な住民たちのようだが」

「信用してもいいように思えます」

「わたしもそう思う。将来性のある星だし、こんな住民のいる星はめったにない。また、品物を持ち帰るのはつまらないことだ。まさか、代金(は)をふみ倒して、星ごと逃げてしまうこともできまい」

「ええ。大戦争をやって、住民が自滅してしまうほど、まだ、この文明は高くないようです」

エヌ博士は、あらためて住民たちにこう提案した。

「では、品物はいまお渡ししておくことにしましょう。代金については、あとでもよろしいことにいたしましょう。来年の春になったら、またまいります。その時に、この星の特産物で払っていただければ、けっこうです」

「それだと助かります。来年の春でしたら、かならずお払います」

住民たちは喜びの声をあげ、約束をした。うそや計略においては、感じられなかった。<sup>④</sup>目的ははたせたようだ。これだけはつきり話がまれば、スポンサーたちも満足してくれるだろう。博士は船内のすべての品物を渡した。

「では、また来年。こんどは、もっとたくさん運んできますよ」

「ぜひ、そう願います。わたしたちも、お待ちしています。ごきげんよう」

住民たちの別れのあいさつに送られて軽くなった宇宙船はふたたび空へ、さらに大気圏外の空間へと戻った。エヌ博士は、窓からふりかえりながら言った。

「いい連中だったな。来年に会うのが楽しみだ。……そうだ、いちおう、あの星の軌道を計算しておいてくれ。こんど訪れる場合に、時期がずれたら困る。早すぎて、冬眠から目ざめるのを待つのは大変だ」

「はい」

問五 部④の説明として最も適当なものを一つ選びなさい。

ア 仲良くなったこの星の住民たちを、心から喜ばせることができたこと。

イ スポンサーとの約束どおり、商品の宣伝と売り込みを終えられたこと。

ウ 船内の商品と引き換えに、この星の珍しい特産物を手に入れられたこと。

エ この星の住民の冬眠の習慣について調べ、スポンサーを満足させること。

問六 部⑤のように助手がふるまったのはなぜですか、説明しなさい。

問七 この文章の魅力について五人の児童が話し合いました。(Ⅰ)、(Ⅱ)に入れるのに最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びなさい。

児童A 星を見つけたエヌ博士が(Ⅰ)なので手ごろだって喜んでたのが、結末を考えるとちょっと悲しいけどおもしろい！

児童B エヌ博士と助手のやりとりが、なんか好きだな。二人で相談

助手は観測器具ととりくみ、その計算をはじめた。しかし、<sup>⑤</sup>なかなか報告をしなかった。

「どうしたのだ。複雑なのか」

「複雑ではありませんが、あまりいい答ではないようです。着陸前に調べておくべきでした」

「いったい、問題点はどこにあるのだ」

「あの星の軌道は、細長い楕円軌道です。私たちの太陽系における彗星のように、これからは太陽から遠ざかる一方です。暗い極寒のなかで、すべてが凍りつく状態に入ります。冬眠もしなければ、どうにもしようがないでしょう」

「つまり、冬が長いというわけだな」

「そういう結論になりましょう」

「太陽のそばに戻って、春が訪れるまで、どれくらいかかるのだ」

「そうですね。地球の時間に換算しますと、ざっと五千年ほど……」

星新一著「冬きたりなば」（新潮文庫刊『ポッコちゃん』所収）より部分掲載

しながら、あれこれ考えてるのがおもしろかった。一人じゃなくて、二人でいられてよかっただろうね。

児童C 品物を買わない理由が「冬眠」に入ることだと知ったとき、博士も助手も何かおかしいと気づくべきだったよね。なぜ気づかないの？って読んでいて思った。でも、住民たちがいい人たちだったし、品物を持って帰るのがいやだったし。

児童D 結局、品物を全部渡して、宇宙船が軽くなったところがよかった。でも、そのあとがまさか、読んでいる人の予想を裏切る意外な終わり方だった！

児童E うん、そうだね。この話は、宇宙の広さとか、時間のこととか、地球とは全然違う世界のことを考えさせてくれた。この物語を通して作者が言いたいことは、（Ⅱ）、みたいなことじゃないかな。

（Ⅰ）

ア 地球より文明がいくらか劣る星

イ 赤っぽい太陽のそばの星

ウ 地球によく似た状態の星

エ 地球より文明がいくらか高い星

（Ⅱ）

ア 地球とは違って宇宙は広くて大きいので、夢や希望がいつぱいつまっている

イ 宇宙で困ったことがあれば、博士と助手のように力を合わせて乗りこえよう

ウ ほんとうにいい品物は、地球とは全然違う星の人にも気に入ってもらえる

エ 自分たちにとって当たり前のことでも、他の場所では通用するとは限らない

部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① 父は往時を回想していた。
- ② 居間で家族とくつろぐ。
- ③ 細かい説明は割愛する。
- ④ おかげで貴い教訓を得た。
- ⑤ ゆかたの生地を裁つ。
- ⑥ 都市部のブツカが下がる。
- ⑦ チャクガン点がとてもよい。
- ⑧ 線路にソって歩く。
- ⑨ ケイトウ立てて覚える。
- ⑩ AIによるギジュツカクシンが著しい。